

ハ ワ イ 警 見

——サラダ・ボウルと煮染め——

荒 木 功

十数年前にも一度、ホノルル空港には来たことがある。その時は、ほんの数時間でロサンゼルスに飛び立った。だが、今度は違う。ここで一年住むのだ。しかし、誰も知らないこの土地で、どう過ごせばよいのか。機内で一睡もせず、疲れた体を引きずりながら、入国手続きをする人々の長い列の中で、私はそのことばかり考えていた。

ホテルから研修先のイースト・ウエスト・センターに移ってほどなく、思わぬ形でその不安が現実のものとなってしまった。私はこのセンターに付属するハレ・マノアという寮で暮し始めたが、ひと月もせぬ内に病の床に臥すはめになった。まだ右も左も解らぬまま、独房のように狭い部屋で、助けてくれる人もなく、自動販売機のパンをかじっては寝て、十日以上も耐えねばならなかった。病状が峠を越えた頃、やつとの思いで医者に辿り着いたが、その診断は「風疹」だという。出発前の無理と急激な環境の変化が、体力と抵抗力を奪ったのだらう。その後も、半年ばかりは体の不調に悩まされた。

出発前から、異なる文化、環境に接するのだから、カルチャー・ショックは受けるだろうと思っていたが、そうしたフィジカル・シ

ョックにおそわれるとは考えてもみなかったことである。逆に、滞在期間を通じてこれといったカルチャー・ショックを経験しなかったことが不思議である。このことには、年齢相応に感受性が低下していることや、「自分」というものが固まっているということもあろうし、自然環境は別として、ハワイでの生活と日本でのそれとにそれほど落差がないということも考えられる。振り返れば、私自身日本の戦後のアメリカナイゼーションの中で成長したのであり、ある種の心の準備が形成されていたことにも気付くのである。

ここで述べるのは、そうした体や心の状態を含めた自分が、よそ者でしかない眼で見、聞き、接した「ハワイ」である。

まず、私の研修先として多くの時間を過したイースト・ウエスト・センターの様子から記してみよう。

センターは、ハワイの象徴とも言うべき、ダイヤモンド・ヘッドやワイキキの高層建築群を南に望む山裾のなだらかな傾斜地にある。センターとは言え、ここは、コミュニケーション、文化・学習、環境と政策、人口問題、資源システムの名を冠する五つの研究所の集合体なのである。つまり、各研究所に所

属する二五〇名近くのスタッフを擁する、太平洋地域では最大規模の研究機関なのである。その名の通り、センターのフィールドは、アメリカ、太平洋、アジアに及んでおり、その課題はこの地域の抱える諸問題の検討、解決を目指すことにあるが、むしろ、それは人類の当面する生存と共存の道を探求することに繋がっていると見るべきだろう。従って、そのスタッフもアメリカ人のみならず、アジア系、太平洋出身の学者、研究者も多く参加し、異なる文化的背景を持つ人々が共同して問題に当るといふシステムになっている。そのため、この敷地内には、三〇〇を越す研究室を持つ本部の建物の他に、研究プロジェクト参加者のための宿泊施設、長期滞在者やインターンの生活する十三階建の寮、地下に大きなキャフテリアと郵便局、上階に会議室のあるホール、庭園その他の野外施設などが整えられている。

さて、この敷地の西端にある一本の道路を隔てて西側に展開しているのが、ハワイ大学の広大なマノア・キャンパスである。この大学は州立で、連邦の補助を受けるセンターとは性格を異にしているが、研究活動を通じて両者のスタッフ、大学院生やインターンの交

流は盛んである。

ハワイ大学もその感はあるが、センターのキャンパスは一層国際色が豊かである。何しろ、スタッフや参加者、職員を含めて開催さ



ポリネシア民俗芸能の実演
(センター内、ジェファソンホールにて)

れる行事に、ミニ・オリンピックがあるぐらいである。

正面に狛犬が置かれ、高い天井がインド建築を思わせるジェファソン・ホールは、普段、各国の新聞が閲覧できるロビーに使われているが、時にはポリネシアの民俗芸能が演じられる会場になる。このホールの裏には立

派な日本式庭園があつて、キャフテリアからそれを眺めながら食事もある。池には鯉も泳いでおり、その一隅には本式の茶室があつて、ハワイ大学茶道部の学生が手前をしているかと思うと、どこからともなくコーランの詠唱が聞こえてくる。真に奇妙な取り合わせだが、共存していて不自然に感じない。

人々の服装は極めてラフで、研究室のあるバーンズ・ホールでもネクタイを締めているスタッフは誰もいないし、セクレタリーはムーム姿で仕事をしており、ハワイの風習に従つて、朝摘んだブルメリアの花を髪飾りにしている女性もいる。ハワイ大学の学生達は大抵、Tシャツにショート・パンツ、ゴムぞうりという軽装で歩き、そのまま教室で講義を受けている。先生も似たようなものでアロハ姿だし、銀行でも会社でもアロハ・シャツとムームは一種の制服のようなものである。冬でも、その上に軽い上着を羽織れば充分やつて行ける。

こうした服装の気軽さは、ハワイの気候の賜物であつて、誰もが同じようにしているけれども、人々自身は決して一様ではない。それは人間の個性の問題というより、文化的背景の相違が加わっているからである。ここで

は、人と交流する場合、相手と自分は異なっているのだという認識から出発しなければならぬ。その相違を埋めるのは、力ではないとすれば言葉しかなく、以心伝心はあり得ないし、沈黙は金どころか非友好的態度とみなされかねない。どこであろうと、ぼかした言葉は通用しないし、英語流の思考で明確に答え、自己を表明せねばならない。それが教室であれば、喋らない学生は能力がないのだと思われてしまう。この意味で、逆の文化が支配的な日本や日本人は誤解を受けたり、不利益を被っていることも少なくないように思える。ハワイから見ていると、例の日米貿易摩擦なども、米国における圧倒的な日本についての情報不足と、コミュニケーション・ギャップが関係している気がする。例えば、私に日本には憲法があるかと聞いた人がある。日本の数字は今でも漢数字だと思っている人もある。なぜなら日本はアジアの国だからというのである。

アメリカ人のみならず、アジアからの参加者で、その国ではエリートに属する知識人も日本のことを良く知っている人は少ない。その多くは欧米の一流大学で学位を受けた人達であるが、その眼は欧米、特に旧宗主国に向

いており、厄介なことにはその基準で日本を見てゐる。彼らを責めてはいけない。我々自身、アジアを良く知っていると言えるのであろうか。知ってもらふ努力を欧米以上にやってきたであろうか。彼らは、第二次大戦中に日本が残した爪痕を忘れていないし、今でもその痛みから日本人のすることを警戒と疑いのまなざしで見ていることを、私は実感として知った。日本は四面楚歌に陥りかねない。

私の親しい台湾出身のあるスタッフは、ある時、日本ではどんな歴史教科書を使っているのかと、私に尋ねた。とっさに私はそれが第二次大戦中の日本と中国の関係を意味するものであることに気付いたが、最近の教科書は読んでいないのでと、苦しい逃げを打つてなかった。今年の夏に、教科書問題が持ち上ったのも、こうした伏流があつてのこととつくづく思うのである。

第二次大戦といえは、ハワイはまた特別の土地である。パール・ハーバーの奇襲で憎まれ、捕虜同然に収容所に入れられた日系人、それでもアメリカへの忠誠を示すため軍に志願して戦った二世部隊などと思ひ出される。こうした人々の苦勞や功績、一般の日系人の

アメリカ社会への貢献にもかかわらず、今だに「ジャップ」に対する反感が燦々しているのを感じる。事実、町の土産物屋の店頭には、一九四一年十二月七日の真珠湾奇襲攻撃を大きく報道した当時の新聞をそのまま複製して売っている。あるレストランは、その新聞を街路に向けてガラスに貼っている程である。

センターからハイウェイを西に三十分も走れば、パール・ハーバーに着く。そこは今も、太平洋方面総司令部や三軍と海兵隊の大基地がある。核兵器もあるという話だから、核戦争になれば最初にたたかれるのはホノルダろうと人々は半本気で噂している。ラジオやテレビは津波などの自然災害を含めて、攻撃を受けた際の緊急放送システムを毎月定期的にテストしている。その時には、町中にサイレンが鳴り響くのだから無気味である。考えてみれば、日本人が忘れかけている第二次大戦の後、この国は幾つかの戦争をしてきたし、今でもある種の臨戦体制にあるのだ。それを迎れば、パール・ハーバーに行き着くのだから、それだけを過去のこととして消し去るのは無理なことかも知れない。その時、千数百人の遺体を抱いて沈没した戦艦アリゾナは、その真上に記念館を作つて

一般に公開されている。戦死者を葬った国立墓地、パンチ・ボールとアリゾナ記念館は人氣のある観光コースで、日本の若い観光客も大勢ここを訪れる。パール・ハーバーには、年に一度海上自衛隊の練習艦隊が遠洋航海の途上、アリゾナ記念館の横を通って入ってくる。帝国海軍以来の慣しで、今でも日系人は艦隊が寄港すると盛大なレセプションを催している。これは、時間や状況の変化にもかかわらず、彼らに潜む望郷の念のしからしむるところであろうか。何しろ、戦前には、立派な帝国海軍水兵さんの種だけでも娘に貰えないかと頼んだ父親がいた、という切ない話があるぐらいだから。

ところで、国際性や異質なものの共存は、何もイースト・ウエスト・センターに限ったことではない。現在においても、歴史を見ても、ハワイはそれをベースに成り立っている。ただ、歴史といっても、ヨーロッパやアジアのように連綿と流れる歴史とは、いささか趣を異にしている。米本土とも違う。アメリカ大陸では、先住民と開拓者やその子孫の歴史とは切斷されてしまっている。元来、無文字社会であるポリネシアは、歴史といって、すべての時間を溶け込ませた平らな過去

が、蒼穹のように広がっているだけだ。しかもそれは、近代的アメリカとしてのハワイに、モザイクのように嵌めこまれているという形で繋がっているのだ。

長い人類の歴史からすれば、この島々に人がやって来て住むようになったのは、ごく最近のことである。最初の移住者が来たのは、たかだか千五百年程前のことにすぎない。大型のアウトリガー・カヌーに豚や鶏を乗せて大量の移住者が来たのは、その五百年後のことである。四百年続いたこの大航海の時代が過ぎると、この南海の島々は我々の夢想する楽園のように、ものうい時だけが流れる場所であった。

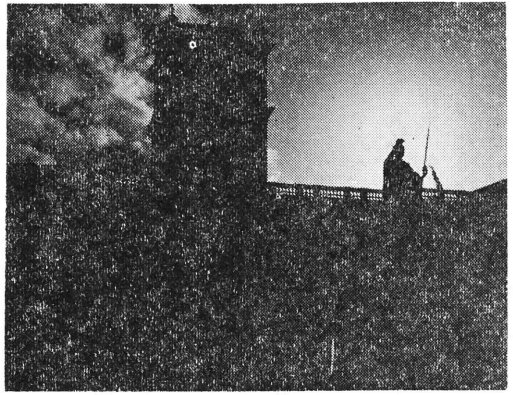
そもそも、それ以前に形成されていたポリネシア人種そのものが偉大な混血の結果なのである。彼ら自体、旧大陸から流れ出し、南太平洋で混淆したモンゴロイド、コーカソイド、ネグロイドの子孫であり、異なるものの共存ないし融合から出発しているのである。

彼らの夢はやがて、一七七八年カウアイ島に來たイギリスの探検家キャプテン・クックに続く白人の來航によって破られることになった。ハワイを「発見」し、サンドイッチ諸島と名付けたクックは、島民によって神とし

て崇められたのだが、島民が彼もまた人間であることを「発見」したのは、船員と彼らとの衝突でクックを殺した時であった。その後、捕鯨船の船員や宣教師が住みつき、西洋文明と細菌性の病気が入り込み、土地所有を基盤とした封建制に近い身分制度やポリネシアに共通するマナやタブーの信仰・遵守もすたれ、人口も減少してしまった。

また、一八七五年にカメハメハ一世によって創設され、約百年続いた王朝も、最後の女王リリウオカラニが退位すると、共和制の内閣が樹立され、さらに米國に併合されて准州となり、一九五九年には五十番目の州に昇格するという経過を辿った。

それからまだ、四半世紀も経っていないのに、ハワイは見事にアメリカに変身している。もともと多民族国家であるアメリカは、ハワイ系の人々がポリネシア人であって、同時にアメリカ市民として生きることを許容する寛大さを持っているが、そうすればそうするほど彼らは否応なく、アメリカのマイノリティにならざるを得ない。混血の進行はこの隘路を突破する有効な方法なのかも知れない。白人の來航以来、その混血は進行しているから、誰も純血にこだわる者はない。むしろ



ハワイを統一したカメハメハー世銅像

ろ、彼らはハワイの子を意味するカマアイナという語で自らを呼び、数代先の人種の異なる親達の名前を幾つも継承して、混血であることを誇りとしている。

これは彼らだけのことではない。ハワイ州には八つの大きな島がある。それを全て合わせても、せいぜい四国の総面積ぐらいいにしかならないし、現在の総人口も百万足らずだ。州都ホノルルのあるオアフは、面積でわずかその10%程度だが、人口は八割弱も抱えている。ここは、まさに人種の展示場であり、サ

ラダ・ボウルだ。現地語でハオリと呼ばれる白人を筆頭に、日本人、中国人、韓国人、フィリピン人、プエルトリコ人、ハワイ・サモア人、タイ人と、実に多種多様である。それぞれがまた、幾重にも混血しているのだから、ややこしい。一九二〇年には、総人口の42%を日系人が占めていたが、一九七〇年には30%を下回った。逆に、白人は、一九五〇年に23%にすぎなかったが、一九八〇年には33%強に増加している。これはむしろ、移民として来たポルトガル人やスペイン人以外の、米本土などから移住した白人の増加によるものである。

この人口比が、ハワイの社会階層や社会的勢力にも反映していることは、見易い道理である。もともと数は少なかったが、砂糖きび農園を持ち、支配層を形成していたのは白人達である。観光業に産業構造のウエイトが移った現在でも、彼らは大企業のオーナーや経営者として、ハワイを牛耳っている。これに挑戦し、市場分割を迫っているのは、日本の資本であり、ハワイ内部の勢力ではない。米本土では日系人はマイノリティだが、ここでは今だに人口の大きな集団として、それなりの勢力を持っている。ハワイでは、どこかのオ

フィスでも日系人の働いているのが見られる。つまり、その多くはホワイト・カラーとして中間層を占めており、医師、弁護士など専門職に進出している人も多い。公務員もそうである。これは日系移民の間で、子供の教育に熱心な人が多かったからである。つまり、ハオリの創り出した産業・労働のシステムのコントロールは、計数能力や言語操作の能力に依存しているのだから、そのシステムの支配から脱するには、そうした能力を身に着けることが有効な手段になることに、彼らは気が付いていたのだ。

実際、私のいたコミュニケーション研究所でも、セクレタリーのほとんどが日系、二・三・四世であった。

中国系は世界に名だたる商売上手だから、商業や料理店経営が多いことは言うまでもない。その故に、彼らはブランチションに定着せず、町に出て商売を始めたため、農園では辛抱強い日系移民が多くなったわけである。東南アジア系やポリネシア系は、数も少なく勢力がないこともあって、どちらかと言えば下働きの仕事をする者が多い。むしろ、こうした状態を社会階層の上下関係だけで見ても、いささか単純である。ここでは

職能の考えが発達しているから、たとえ下働きの仕事であっても、専門的資格を持つてゐるのだから、妄りに他人がそれに容喙すべきではないのだ。例えば、研究室を片付けてくれる人がいる場合には、自分で勝手に片付けてはいけない。その人の仕事を奪うことになるからだ。

ハワイは、大学卒業者の望むホワイト・カラーの職種は少ないから、いきおい公務員や教育職に誰かが目をつけることになる。ところが、従来は日系人、それも高等教育を受けた者が多かったので、その人達が早くから州や連邦の公務員や教員に多く就いていたという経過がある。しかし、これまた教育程度の高い白人が増えてくると、彼らもその職を望む者が多くなる。すると、彼らから見れば、公務員は日系人ばかりで占められているように見える。そこで彼らは、就職機会の人種的平等を求めてキャンペーンや運動を起こすことになる、という他では珍らしい現象が出現してくるのである。一般に、白人は社会的劣位に立たされるのが少ないから、そうしたことが余計気になるのであろうか。

こうした、人種の混合社会では当然のことながら、言語にもこのことが現われてくる。

むろん、正式の言葉は英語であるが、英語の話せない移民の間で、また異なる人種集団の間でなんとかコミュニケーションするため発生したのがピジン英語である。教科書的文法を無視した所があるので、簡単と言えば簡単だが、普通の英語とイントネーションなども異なるから、ちょっと聞いた位では解らない。

I don't go. は I no go. だし、the は da と発音されるし、語尾には英語にはないノーマンなどが付け加えられることもある。あのノーマンに当る広島弁のノーマンがくっついたものらしい。移民の子供達は普段、こんな言葉を喋っているのだが、学校に行き出すと正しい英語に匡正させられる。これができないければ、まずホワイト・カラーにはなれないだろう。しかし、普通の英語にもハワイ語はかなり取り入れられている。有難うはマハロだし、仕事が終われば、今日はパウ(終り)だと挨拶し合う。方角は、北・南と言わずに、マウカ(山側)、マカイ(海側)といった道を教える。むろん、日本語も英語に入っている。サシミやテリヤキはどこでもお目に掛かるが、オゴ(海髪)は私も知らなかった日本語だ。スシやサシミやトーフが言葉としてだけでなく、食物としてもハワイのみならず米本土

に広がっていることや、茶の湯や歌舞伎といったいわゆる代表的な日本文化を観たり演じたりする外人がいることは、特に珍らしいことではない。だが面白いことに、ここでは日本人に倣って、家に入る時には誰もが靴を脱ぐことになっている。けれども下駄箱はどこにもない。逆に、仏教寺院では靴のまま入って、椅子でお説教を聞く。いずれも、文化が伝播する時の変容の例として考えることもできるだろう。こうした変容の例には、ハワイの爆竹を挙げることもできる。大晦日の夜には爆竹が大量に炸裂し、あつという間にホノルル中が霧のロンドンになってしまう。しかし、もともとこの風習を持って来た中国人は、今でも旧暦の正月にしかやらないのである。更に挙げれば、クリスマスにやってくるのは、白い髭を付けてはいるが、海水パンツを穿いたサンタクロースなのだ。

このように、ハワイは異なる文化の交差・融合、変容を数多く見ることができ、中でも日系人社会は、もとの文化を多く保存している方だろう。ホノルルには神社もあるから、大晦日には初詣で行く人が多いし、お盆には各地で盆踊りが行なわれる。海岸沿いの公園などでみかける日系人のピクニック



大晦日の初詣風景
(ホノルル出雲大社にて)

(ポト・ラックと呼ばれる食物持ち寄りの野外パーティ)では、季節を問わず煮染めが登場する。それに、日系人社会は、世間が狭いと言われるように、やや閉鎖的な色彩を持っており、その上、現在の日本の日本人一般より、日本の伝統的な考え方や価値感を大事にしていて保守的だと言われる。世間が狭いということでは、県人会や村人会まで存在しているということもある。もとの移民のキャンプでは同じキャンプの人々が同じ寺の信者であって、固く結ばれていたこともそれに関係があるのだろう。だから、比較的若い世代は、日系人社会は棲みにくいと感じているし、四・五世はむしろ反発的でさえあるのだから、完全に白人なみのアメリカ人として扱われない時もあり、彼らのアイデンティティの問題は深刻である。

彼らにしてみれば日本は外国なのであり、何らかの親密感、または近きゆえの嫌悪感があるとしても、日本に興味を持てば、大学に入ってから、日本語学習あるいは日本研究として、他の人種と同様、学び始めなければならないのである。こうした世代の増加につれて、アメリカの公教育体系とは別にこれまでハワイ各地にあった日本語学校も廃れ始め、今や廃校寸前のものである。これは、日本の経済力の上昇に伴って高まって来た日本語学習熱の高まりと反比例しており、むしろ、日系人だから学ぶというより、日本語が正規の科目として履習できる高校が増えていることに見られるように、外国における日本語の比重の変化に関係しているように思われる。

これは宗教ないし、信仰の面でも同じである。このことは、もはや日系人から日本の仏教をというわけではなく、一方で、自らの課題に答えてくれる宗教を自分の問題として探す人も多くなり、伝統仏教離れが進むと共に、他方で、ハワイでも仏教に何かを見出すとする熱心な白人達がいるというクロス・オーバー現象を見ても解ることである。

いずれにしても、ハワイ共和国政府と徳川幕府との交渉により、一八六八年に渡航した

「元年者」を始めとする初期の日系移民達は、朝の六時から夕方の五時まで、一月のうち二六日、文字通りハワイの炎天下で酷しい労働に従事してきたのである。それも出稼ぎのつもりが、永住となり、それがまた他国ゆえの様々な困難や苦勞をもたらしたのであるが、頼母子から銀行を創り、病院を建て、学校を開き、州知事を出し、幾多の努力を重ね、助け合いながら自らの道を開いてきたのが彼らである。

現在は、移民とその子孫の他にも、戦争花嫁を含めた色々な種類の多くの日本人が移住し、滞在している。ともすれば、我々日本人にいる日本人は海外同朋の存在を忘れがちになるけれども、彼らの苦勞や新たな問題にも目を向ける必要があるのではないだろうか。

ハワイはまさに世界のイースト・ウエスト・センターである。人種のサラダ・ボウルの中にあって日本人の煮染めも健在である。その日本人を含めた多種多様な人々の異質なものの共存と融合は、人類の明日へ向けての「実験」のような気がする。たぶん、それはまだハワイにしかないという意味で、注目せねばならぬ「実験」であろう。

(あらき いさお 社会学部助教授)